



桜守
さくらもり

Custodian of the Cherries

Toemon Sano

The life of the cherry blossom, The heart of the garden

Published by Soshisha, 1998

『桜のいのち庭のこころ』

佐野 とうえもん
さの とうえもん

春の気配を感じると、桜が待ち遠しくなります。
もう春はすぐそこですね。

「桜守」と呼ばれる方がいます。京都の植木職人、十六代目佐野藤右衛門さん。
本業の造園業とともに、全国の桜の調査や保存をなさっています。

冬の間枯れ木のようなだった桜は、春になると一気に花が咲き、生き生きとします。
入学式や始業式の頃に咲くので、桜は「はじまり」を予感させますね。
でも藤右衛門さんはこんなふうに語っています。

「花が咲くのは、桜の一年間の最後の仕事なんですわ。」

桜の開花は、桜の一年の最初の仕事ではなく、最後だと彼は言います。

「そして、花を散らして初めて芽が出て一年間の営みが始まるんです。」

花が散って、誰も振り返らなくなった桜の木。
これが桜のスタートなのです。

「ですから咲く花は、前年の成果を出しとるだけやと思うんですわ。」

だから花が散ったあとのほうが、むしろは気になりますわ。

うまく芽が出るか、どうかと。」

人も華やかな成功の瞬間は、みんなの注目的になります。

その興奮が収まる頃、私たちの中には何が生まれているのでしょうか。

桜はきっと知っています。「大切なのは、その『芽』なのだ」と。

(『桜のいのち庭のこころ』 佐野藤右衛門 草思社)

花物語

比田井宗玉

